

心と笑顔

中 三

ある夏の日、当時中学一年生だった僕は、部活のA先輩に連れられて、Bという先輩に会いに行きました。

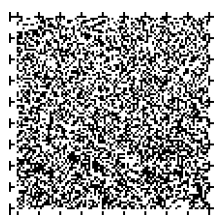
それはA先輩から「俺の友達に、体がうまく動かない友達がいるんだ。でも、すごくいい奴なんだぜ。」と聞いた僕が、ぜひ会ってみたいと言ったからです。

そして、厳しい練習の合間に、友達とA先輩と一緒にB先輩の家に行くことになりました。行く前、僕はなぜか緊張していました。B先輩はうまくしゃべれないとA先輩が言っていたので、ちゃんと話せるかなという気持ちで一杯だったからです。しかし、会ってみると、確かにうまくしゃべれることはできないけれど、笑った顔はみんなと同じで、とてもきれいで、うれしい、楽しいなどの気持ちも伝わってきました。そして、B先輩の家から帰る時には、緊張した気持ちは一切なくなり、

また会えたらいいなと、まるで友達と遊んだ後のような、ちよつときみしい気持ちになりました。

僕の母は昔、養護施設で働いていたことがあり、B先輩のようなうまく体が動かない子もよくお世話をしていたと言います。「たとえしゃべれなくても、足が動かなくても、心は同じ。楽しいことは楽しいし、それがうまく表せないだけ。心はあなたと同じなのよ。」と、母に言われた僕は、B先輩の笑顔を見たときに感じたものは、そのことだったのだろうと思いました。

時は流れ、その年の運動会の日のことです。その日、B先輩の家に行ったあと、再度会いに行くことができませんでした。しかし、B先輩も今日の運動会に参加すると聞いていたので、会えることを楽しみにしていました。そして、百メートル走の時に、B先輩の姿を見ることができました。百メートルの半分の位置からのスタートでした。自分では動くことができないので、寝たまま動くことのできる椅子を、A先輩が押して走っていました。そのときの二人は、とても楽しそうに笑っていました。



それを見ていた私の母は泣いていました。僕も涙が出そうでした。何て良い笑顔なのだろうと。僕は、またB先輩の笑顔が見られて、本当にうれしかったことを覚えています。

それから約2年。B先輩もA先輩も卒業し、僕もその間にほかの学校へ転校しました。僕は将来、介護福祉士になりたいと思っています。友達の笑顔を見ると思い出す、あの走っている時のB先輩の笑顔。誰にでも心があり、楽しむ権利があるということ。それを教えてくれたA先輩とB先輩の笑顔を、将来たくさん見られたらいいなと思っています。

